

# 人口移動と健康—近世東北在郷町の死亡分析—

## Migration and Health: Mortality in Early Modern Northeastern Town

黒須里美（麗澤大学）・高橋美由紀（立正大学）

Satomi Kurosu (Reitaku University), Miyuki Takahashi (Rissho University)

Email: skurosu@reitaku-u.ac.jp, miyu-tak@ris.ac.jp

本報告は近世東北在郷町における死亡パターンとその決定要因について、農村との比較、また在郷町に生まれた人々と移住してきた人々の比較を加味しながらその特徴を明らかにすることを目的とする。江戸時代の庶民の地理的移動の頻度と距離が明らかになってきているが、その地理的移動が人々のその後のライフコースに与える影響についての研究はまだ少ない。都市は死亡率が高く農村からの移動人口によって再生産が行われていたとされる「都市蟻地獄説」についても、都市と周辺農村との比較を含めた再検討が必要である。郡山には周辺農村だけでなく越後国（現在の新潟県）からの労働移動が多かった（高橋 2005）。また天明の飢饉以降、人口減少への対策として越後からの移住者を積極的に受け入れ、婚姻を推奨するなどの対策が取られた。このため、郡山の人口の半数は移住者である。農村との比較によって都市の人口学的特徴を明らかにし、さらに移住者のその後の結婚・出生・生存を含めたライフコースを明らかにすることは、現代の移住者の行動を考える上でも示唆がある。

資料は 1729-1870 年の郡山上町人別改帳（今泉家文書、郡山市歴史資料館）である。そのうち欠年は 18 年あり、全体で 19 万 4878 人年である。町村間移動数は 1 万 2203 件あることも判明している。本報告では Tsuya and Kurosu(2004)の方法に倣い、イベントヒストリー分析を用いて町場の経済状況、世帯の社会経済的地位、世帯内の地位、そして出生地や配偶者の有無などを死亡リスクへの影響を探る。その結果を Tsuya and Kurosu(2004)らの成果と比較するとともに、郡山への移住者の属性を加味した分析で在郷町出身者とそうでないものとで死亡リスクに違いがあるのかを探る。

町場である郡山と農村地域で平均余命を比較した場合、男性でも女性でも農村地域の方が高くここからは、「町場のほうが農村よりも死亡率が高い」という都市蟻地獄説における自然増加の「死亡」に関する関係性は成立するように思われる。しかし、イベントヒストリー分析の結果からは、地域経済や世帯の世帯経済、個人の属性の影響において類似性が見られる。さらに死亡リスクは移住者よりも郡山出身者の方が高かった。移住者は町場で最後の時を迎えるよりは故郷に戻ることを選択した可能性などが示唆される。

<参考文献>

高橋美由紀 2005 『在郷町の歴史人口学—近世における地域と地方都市の発展—』ミネルヴァ書房

Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu 2004 “Mortality and Household in Two Ou Villages, 1716-1870,” pp.253-292 in Bengtsson, Tommy and Cameron Campbell and James Lee *et al.* *Life under Pressure: Mortality and Living Standard in Europe and Asia, 1700-1900*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.